



令和5年度第1回企画展

収蔵品で語る宮代の民俗4

人の一生

～ゆりかごから墓場まで～

展示期間：令和5年7月15日（土）～10月22日（日）

開館時間：9:30～16:30



宮代町郷土資料館

〒345-0817

埼玉県南埼玉郡宮代町字西原289番地

TEL 0480-34-8882 FAX 0480-32-5601

Email [museum@town.miyashiro.saitama.jp](mailto:museum@town.miyashiro.saitama.jp)

## ごあいさつ

人がこの世に生を受け、そして亡くなっていくまでの長い年月の中で、その人が成長していく上で大切とされるいくつかの節目に、「人生儀礼」と呼ばれる儀礼が行われます。

古くから行われてきたこの「人生儀礼」は、基本的に家族を単位として行われる日本の伝統行事とも言えます。その多くは、明治・大正・昭和・平成・令和と年号が変われども、基本的には時期や方法などは変わらず行われてきていますが、一部には、昭和30～40年代の高度経済成長期を境にして、その行われ方が大きく変わったものもあります。

郷土資料館は、郷土みやしろに関する様々な資料を収蔵していますが、「人生儀礼」に関する資料は収集・収蔵するように努めているものの一つです。

今回の企画展は「収蔵品で語る宮代の民俗4 人の一生～ゆりかごから墓場まで～」と題して、明治時代から昭和40年代までを対象に、収蔵資料の中から「人生儀礼」に関するものをご紹介します。社会環境などの変化がある中で、今と昔とで「人生儀礼」の行われ方や用具などがどのように変化していったのかをご覧ください。ことにより、皆様にとっての「人生儀礼」とは何かをお考えいただくきっかけになれば幸いです。

最後になりましたが、今回の展示物を始めとして、寄贈・寄託・複写等により資料収集に御協力くださいました方々に心より御礼申し上げ、御挨拶とさせていただきます。

令和5年7月  
宮代町郷土資料館

### ～ 凡 例 ～

1. 本書は、令和5年7月15日（土）から10月22日（日）まで開催される、宮代町郷土資料館令和5年度第1回企画展「収蔵品で語る宮代の民俗4 人の一生～ゆりかごから墓場まで～」の展示図録です。
2. 展示開催期間中の休館日は次の通りです。  
7月18・24・31日、8月7・14・15・21・28日、9月4・11・19・25～29日、10月2・10・16日
3. 展示の企画及びポスター・図録の執筆、編集等は、当館学芸員の横内美穂が担当しました。
4. 会場及び本書中の敬称は省略いたしました。
5. 本企画展は、「宮代町史 民俗編」（平成15年3月31日刊行／宮代町教育委員会）第5章に基づいた構成となっています。調査を行ったのは刊行以前であり、すでに20年以上前の事例となっています。現在は行われていない祭礼なども事例として挙げている場合がありますので、ご了承ください。
6. 掲載した資料は展示した資料のすべてではなく、また、写真の縮尺も任意のものです。
7. 資料提供・協力者一覧（五十音順・敬称略）  
青木秀雄・新井隆夫・飯山良平・岩崎俊男・加藤武次・金子和生・齋藤勘五郎・島村明・島村宗作・高畑博・戸田義一・富田利幸・中村清子・中村啓子・中村多計志・中村忠男・成田稔・野武きみ子・矢部栄子・渡辺栄・辰新田浅間神社・姫宮神社・山崎赤松浅間神社

## 誕生と成長

現在は、子供を授かることに対して科学の力が大きく影響する場合がありますが、以前は「子供は天からの授かりもの」とされ、妊娠や出産は人知の及ばない領域でした。そして、子供の誕生は夫婦の喜びであるとともに、家やムラが存続していく上でも重要でした。

子供が誕生してからも、医療が今ほど発達していなかった時代は、育てて大きくなること自体が難しかったため、子供の成長に合わせて節目に行われる人生儀礼じんせいぎらいは、子が無事に成長するために必要なものとされました。

背守りせまものある産着うぶぎや紐解きの祝いひもとに関する古文書など、展示した資料からは、子供が無事に元気に成長してほしいという切なる願いが伝わってきます。



### 子育て地蔵のろうそく（平成3年7月24日／東条原郷地蔵）

安産祈願の一つとして、7月24日に東条原でおこなわれる祭礼「地蔵様の灯籠とうろう」で、灯されて短くなったろうそくを妊婦のお守りとしてももらいました。これをお産の時に灯すと、燃え尽きるまでに子供が生まれるといわれていました。そのため、配られるろうそくは短いほど喜ばれました。

### セッチン参りの供え物（平成11年12月撮影／西原S家）

お七夜には、産婆さんばが良い着物を着させた生児を抱いて、半紙に包んだオサゴを持った姑や実家の母などと共に、荒神様こうじんさま・井戸神様いどがみさま・セッチン様などの家の神々をお参りしました。セッチン（便所）では頭をさげてお参りしたあと、持ってきたオサゴなどを便所の棧や明り取りの窓に下げました。「一生世話になるところだから」「便所は危ないから」だそうです。



### 産着・祝衣着（男児）（昭和30年代／矢部氏寄贈）

7～9月の盛夏の頃限定で着用される「紹ろ」という生地が使われています。「紹」とは、経糸たていとと横糸の本数を減らして生地生地の密度を粗くすることにより、通気性が良く、透け感があることで見た目にも涼しげな生地のことです。背に入った紋が、背守りの代わりとなっている。

### 産着・祝衣着（女兒）

（昭和50年代／青木氏寄贈）

背守りは「糸じるし」と呼ばれるもので、紅白の糸で縦と斜めに運針し、糸端は長く伸ばしてあります。一説によると、糸端を長く伸ばしておくのは、子供が溺れるなどの危機に、産土神うぶすながみや荒神様こうじんさまがこの糸を引っ張り上げてくれると信じられていたからだそうです。また、同じ紅白の糸で紐飾りも施されている。腰のあたりで縫いとめて丈が短くなっているのは、夏の着物として実際に着たのかもしれませんがね。





### 初山のうちわ（昭和 25 年頃／島村氏寄贈）

初山のうちわのデザインは、子供が元気に遊んでいる絵柄が多いですが、世相を表しているものもあります。写真のうちわは昭和 25 年頃のものですが、左側の絵柄は当時人気のあった女優が描かれています。

### 初山で朱印をいただいた子

（令和 4 年 7 月 1 日撮影／山崎赤松浅間神社）

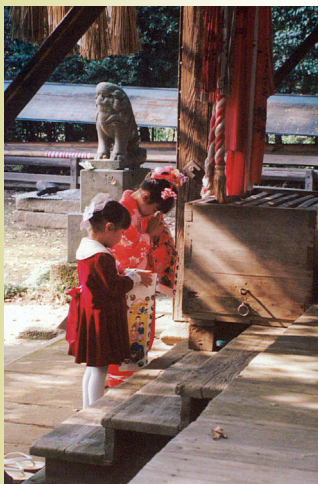
浅間神社に登拝したのち、子供のおでこに朱印をいただき、御札・うちわ・紅白まんじゅうを受領します。



### イッショウモチ

（平成 11 年／中村氏所蔵）

子供が生まれて初めて迎える誕生日を「初誕生」といいます。初誕生には餅をついて祝いますが、この日までに歩いた子にはイッショウモチを背負わせました。イッショウモチの響きから「一生食べ物に困らないように」「一生、健康でありますように」との願いが込められ、背負って数歩でも歩けば「身を立てられる」、転んだら「厄落としができた」など、すべて縁起の良いものとされました。



### 帯解きのお参り

（平成 2 年 11 月撮影／姫宮神社）

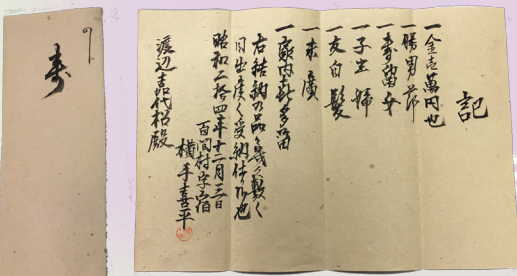
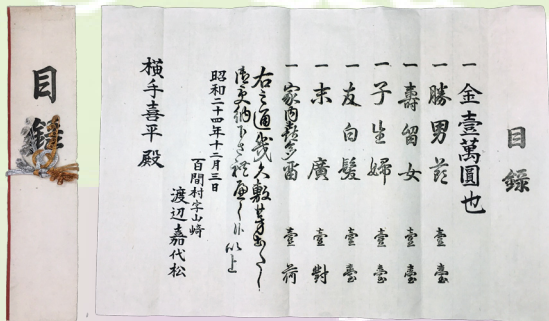
男女とも数えの七歳になると鎮守様ちんじゆさまにお参りしました。かつて着物を常用していた頃までは、紐が縫いつけられた着物から大人と同じように帯を使う着物になることを祝うものでした。そのため、着物の紐を解くことひもときから「紐解」とも呼ばれました。現在のように七五三として三歳・五歳・七歳を祝うようになったのは戦後しばらくたってからですが、「七歳までは神の子」という言葉のとおり、特に七歳に行われるものは「神の子から人の子（村の一員）」になるための重要な節目であったといえます。

# 結婚

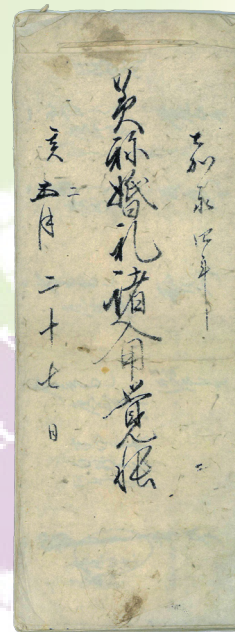
戦前は、男性は20歳の徴兵検査ちようへいけんさが終わると一人前とされ、25歳くらいまでには縁談が来  
ました。女性は19歳から23歳くらいまでが適齢期とされました。理想とされる夫婦の年  
齢差は2・3歳で、いずれも、仲を取り持つ仲人なこうどが紹介した見合い結婚が多かったです。そ  
してその通婚圏つうこんけんは、仲人が徒歩や自転車で活動できる範囲であることがほとんどでした。  
戦後は、占領軍であったアメリカの影響や日本における高度経済成長などによって、結婚に  
至るまでの年齢や経緯などは概ね自由おおむとなり、男女の出会いのや結婚に至るまでの場やプロ  
セス、服装などあらゆるものが大きく変化しました。

しかし現代に至っても、結婚が夫婦二人だけではなく家族・親族・その他の周囲を取り巻  
く人々にとって、大きな喜びであることは変わりません。

結婚してからも、夫婦それぞれが厄年や年祝いという年齢における節目を迎えます。厄年  
は男25歳・42歳、女19歳・33歳がそれにあたり、それぞれ前厄と後厄があり、厄を除  
けるために神社にお参りします。年祝いは長寿の祝いともいい、一般的に還暦かんれき・喜寿きじゆ・米寿べいじゆ  
などがあります。

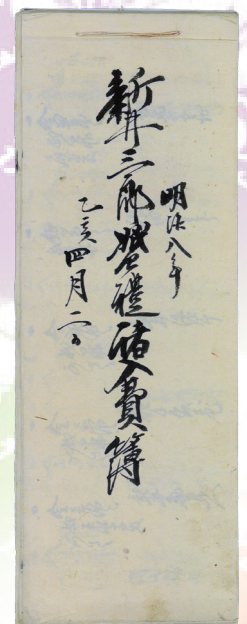


結納目録・結納受領書  
(昭和24年12月3日/渡辺氏寄贈)



美祢婚礼諸入用覚帳

嘉永4年(1851)2月27日  
新井家文書



新井三郎婚礼諸入費簿

明治8年(1875)4月2日  
新井家文書



### 婚礼記念写真（昭和初期／新井家文書）

華やかな絵柄の振袖を着た花嫁と、羽織袴を着用した花婿、そして親族と思われる男性3名が、家の入口で記念撮影をしています。花嫁の着物は、嫁入り後に袖を留めれば「留袖（江戸棲）」として正礼装として着用できるデザインとなっています。



### 参列者の服装（昭和初期／新井家文書）

結婚式における親族の集合写真と思われます。女性は「江戸棲（留袖）」を着ていますが、絵柄の違いに、世代による流行の変化がうかがえます。



### 白無垢（昭和30年代／中村氏寄贈）

白地にふんだんに施された刺繍が目を引く白無垢である。昭和40年代になってくると、結婚式を結婚式場で貸衣装を着て行うようになっていったため、このような白無垢の衣裳が残されることも少なくなりました。



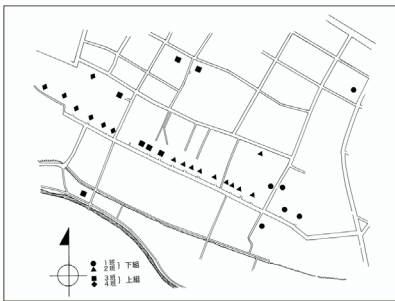
### 米寿の祝い（昭和50年代／飯山氏所蔵）

写真がモノクロのためわかりづらいですが、中央にいる米寿を迎えた男性が赤い頭巾とチャンチャンコを着用していることがわかります。周囲にいるのは孫・曾孫世代の子どもたちでしょうか。

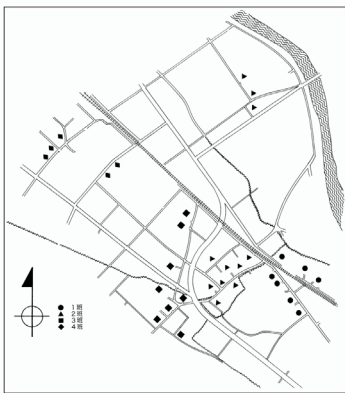
# 葬 送

人が亡くなると、地域の人々の手伝いを得ながら葬送儀礼そうそうぎらいをおこないました。地区ごとに「葬式組」という班が組まれていて、関係者への連絡から葬式の準備、葬具づくりや墓所に埋葬するまでの手伝いが行われました。現在は、専門に葬儀を執り行う葬儀屋などがあり、葬儀に関する様々な準備や会場の手配などが行われていますが、昭和50年代頃までは自宅で葬儀を行うことも多く、こうした葬式組による手伝いは大変助かるものでした。

人が亡くなってから後も、故人を偲ぶ機会として年忌供養ねんきくようというものがあり、故人の祥月命日しょうつきめいにちに行われる追善供養ついぜんくようとして一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、二十一回忌、二十七回忌、三十三回忌、五十回忌等がおこなわれています。



辰新田の葬式組

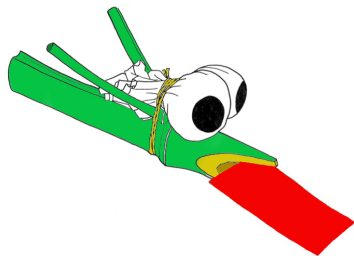


須賀上の葬式組

## 葬式組（辰新田・須賀上）（昭和20～30年代）

葬式組は、町内の各地区でさまざまに組織されました。昭和30年頃はおおむね1地区が4班に分かれ、2班ごとに組になって葬式を手伝いました。役割としては、役場への連絡、寺への連絡、装具づくり、オカッテ、ハヤツカイ、ロクドウ（六道）、受付、帳場などがあり、これらを班長（オショウバンといった）が総括しました。

昭和30年代に火葬が行われるようになり、昭和50年代に葬儀屋ができはじめて自宅での葬儀がなくなるにつれ、葬式組での助け合いも減少していきました。



## 辰新田のシシ（昭和30年代）

辰新田における葬具の一つです。葬式組の当番の者が作成します。シシの目玉の部分は米糠を半紙で包み、墨で描いています。



## 喪服・着物（昭和40年代／野武氏寄贈）



葬儀の様子（昭和 32 年代／島村氏所蔵）

正面に座棺、その両脇に蓮華と生花が飾られています。導師による読経のシーンを写しているものと思われます。



葬列

（昭和 32 年／島村氏所蔵）

葬列は、生花に続きコンゴウツエを持った男性二人、蓮華を持つ男性二人、そして導師、棺と続いています。棺は人力で引っ張る形の霊柩車に乗せられていて、黒い帽子をかぶった男性が引いています。子供たちが興味深そうに見ている様子が見えます。



出棺の様子（昭和 40 年代／渡辺氏所蔵）

自宅から墓地へ出棺していく様子を写しています。左下の白い帽子をかぶったロクドウ役の男性が二人で担いでいるのが棺桶で、その大きさ・形から座棺とわかります。



葬列

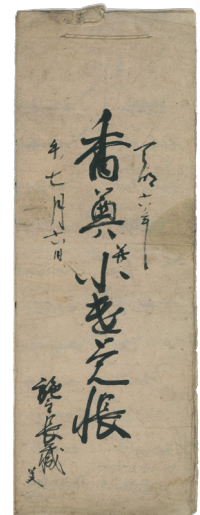
（昭和 40 年代／渡辺氏所蔵）

先頭の人が、棒に白黒の紙を巻きつけた「コンゴウツエ」を持ち、脇に輪花、後ろに蓮華、位牌と続いています。庭から墓地へと向かう瞬間を写しているものと思われます。



香典帳（元文 6 年（1741）2 月 29 日／岩崎家文書）

収蔵している古文書の奏でもっとも古い香典帳です。



香典並小遣覚帳

（天明 6 年（1786）7 月 6 日／新井家文書）

収蔵している古文書の奏で二番目に古い香典帳です。香典の記録の他、坂東・秩父などの札所めぐりをした時にかかったお金が記録されています。



# 展示資料一覽

	資料名	年代	寄贈者等
誕生と成長			
1	(パネル) 水天宮の腹帯	平成 6 年頃	中村氏寄贈
2	子育て地蔵のろうそく	平成 3 年 7 月 24 日	東条原郷地蔵
3	(パネル) セツチン参りの供え物	平成 11 年 12 月撮影	(西原 S 家)
4	(パネル) 御宮参り	平成 2 年 11 月撮影	姫宮神社
5	産着・祝い着 (男児)	昭和 30 年代	矢部氏寄贈
6	産着・祝い着 (女児)	昭和 30 年代	矢部氏寄贈
7	産着・祝い着 (女児) 襦袢	昭和 30 年代	矢部氏寄贈
8	産着・祝い着 (女児)	昭和 50 年代	青木氏寄贈
9	産着・祝い着 (男児)	昭和初期か	齋藤氏寄贈
10	初産御祝儀覚帳	天保 4 年 (1833) 8 月吉日	新井家文書
11	産着納受并諸入用覚帳	嘉永 5 年 (1852) 6 月 2 5 日	新井家文書
12	(パネル) 初山のうちわ	昭和 25 年頃	島村氏寄贈
13	御札	平成 4 年 7 月	辰新田浅間神社
14	御札	平成 6 年 7 月	山崎赤松浅間神社
15	初山のうちわ	平成 6 年 7 月	山崎赤松浅間神社
16	(パネル) 初山で御朱印をいただいた子	令和 4 年 7 月 1 日	山崎赤松浅間神社
17	(パネル) 初山で御朱印をいただいた子	令和 4 年 7 月 1 日	山崎赤松浅間神社
18	(パネル) 初山で御朱印をいただいた子	令和 4 年 7 月 1 日	山崎赤松浅間神社
19	(パネル) 初山で御朱印をいただいた子	令和 4 年 7 月 1 日	山崎赤松浅間神社
20	(パネル) 初節句 (女児)	昭和初期か	
21	(パネル) イッショウモチを背負った子	平成 11 年 4 月	
22	(パネル) イッショウモチ	平成 11 年 4 月	
23	(パネル) 帯解きのお参り	平成 2 年 11 月	
24	美祢紐解御祝儀重配覚帳	天保 11 年 (1840) 霜月 14 日	
25	女児 七五三の草履	昭和 40 年代	
26	女児 七五三のバック	昭和 40 年代	
結婚			
27	結納目録	昭和 24 年 12 月 3 日	渡辺氏寄贈
28	結納品受領書	昭和 24 年 12 月 3 日	渡辺氏寄贈
29	結納返しの品受領書	昭和 20 年代か	渡辺氏寄贈
30	美祢婚礼諸入用覚帳	嘉永 4 年 (1851) 2 月 27 日	新井家文書
31	新井三郎婚礼諸入費簿	明治 8 年 (1875) 4 月 2 日	新井家文書
32	御婚礼筆筭乃棗	昭和 40 年代	加藤氏寄贈
33	(パネル) 婚礼記念写真	昭和初期	新井家文書
34	(パネル) 参列者の服装	昭和初期	新井家文書
35	紋付の羽織	昭和初期	高畑氏寄贈
36	江戸褌	大正時代	金子氏寄贈

	資料名	年代	寄贈者等
37	白無垢	大正時代	金子氏寄贈
38	祝儀の盃	昭和30年代	渡辺氏寄贈
39	祝儀の盃	昭和初期	富田氏寄贈
40	祝儀のお盃	昭和30年代	中村氏寄贈
41	筥迫	昭和30年代	中村氏寄贈
42	ツノカクシ	昭和20~30年代	中村氏寄贈
43	花嫁用の帯(丸帯)	昭和初期	金子氏寄贈
44	花嫁用の帯(袋帯)	昭和30年代	高畑氏寄贈
45	白無垢	昭和30年代	中村氏寄贈
46	図1 祝儀の座順(須賀 A家)	昭和20~30年代	
47	(パネル) 米寿の祝い	昭和50年代	飯山氏所蔵
48	還暦祝いの着物(女性用)	昭和時代	戸田氏寄贈

## 葬送

49	図2・3	葬式組(辰新田・須賀上)	昭和20~30年代	
50	図4	辰新田のシシ	昭和30年代	
51	(パネル)	葬儀の様子	昭和32年	島村氏所蔵
52	(パネル)	葬列	昭和32年	島村氏所蔵
53	(パネル)	出棺の様子	昭和40年代	渡辺氏所蔵
54	(パネル)	葬列	昭和40年代	渡辺氏所蔵
55		喪服・着物	昭和40年代	野武氏寄贈
56		喪服用の帯	昭和時代	高畑氏寄贈
57		喪服用の帯	昭和時代	高畑氏寄贈
58		香典帳	元文6年(1741)2月29日	岩崎家文書
59		香典並小遣覚帳	天明6年(1786)7月6日	新井家文書
60		一周忌法事案内	(明治)12月9日	新井家文書
61		壽永道昌居士三回忌(貫物・仏前控)	弘化2年(1849)3月3日	新井家文書
62		壽永道昌居士十七回忌・盛客 妙貞大姉七回忌諸入用帳	安政6年(1859)2月9日	新井家文書
63		莊嚴妙遊大姉二十一回忌	嘉永4年(1851)11月15日	新井家文書
64		五十回忌	文政9年(1826)10月7日	

## 探しています！

郷土資料館では、宮代町に関するあらゆる資料を収集対象としています。特に、昭和30~60年代に町域で撮影された写真を探しています。あなたの持っている写真は、町の歴史の一端を記録した貴重な写真かもしれません。

断舎利で捨ててしまう前に、ぜひご一報ください！

また、学校でもらった学級通信や学校だより、PTAだより、地区で独自に作った回覧物なども貴重な資料となります。「こんなものは・・・いらぬよね!？」と思ったら、ぜひ郷土資料館にご連絡を!!

宮代町郷土資料館 TEL 0480-34-8882 FAX 0480-32-5601